

新作能『ロミオとジュリエット』初演を祝して

岡本 靖正

OKAMOTO Yasumasa

新作能『ロミオとジュリエット』の上演で新年を迎えることができたのは、めでたいことでした。原テキストのどの部分を中心に一曲が構成されるか、たいへん楽しみにしていました。プログラムに「原作／上田（宗片）邦義」、「節付・作舞／野村四郎」、「演出／笠井賢一」とあり、いまは「原作」に話を限定することにします。

観客に日本語と英語の台本が提供されたのは、有難いことでした。原テキストをいかに解体し、能として構成するか、それをどのような日本語の詞章にするか。作者の苦心は少なくとも二重であったはずです。

たくさんある現代版 *Romeo and Juliet* のどのテキストを底本としたかは、句読点まで含めて考えると、よくわかりませんが、オックスフォード・シェイクスピア 1 冊本全集 (*William Shakespeare: The Complete Works*, 2nd edn., eds. John Jowett, William Montgomery, Gary Taylor, and Stanley Wells. Oxford University Press, 2005) の幕場行数を用いて冒頭部のテキストの構成を確認してみました。

僧ロレンスが口開けアイとして、名のりのあと、状況を説明し、ジュリエット（ワキ）が乳母（ツレ）を伴って登場してワキ座に着座すると、登場楽に乗ってシテのロミオが登

場します。

Romeo: Is love a tender thing? It is too rough,	1.4.25
Too rude, too boisterous; and it pricks like thorn.	1.4.26
I dreamt a dream tonight. My mind misgives	1.4.50 / 106
Some consequence yet hanging in the stars . . .	1.4.107
Chorus: But he, that hath the steerage of my course,	1.4.112
Direct my sail.	1.4.113
Juliet: [<i>Stands up.</i>] It is much pride for fair without	1.3.91 / 92
The fair within to hide.	1.3.92

[*Juliet's dance of Iroe.*]

Romeo の最初の 2 行は、マーキューシオ、ベンヴェーリオらとキャピュレット家の宴会に向かう途中のロミオの台詞ですが、次の半行 ('I dreamt a dream tonight.')

は彼らの道行きがさらに進んでからのロミオの台詞、そしてその「夢」をきっかけにマーキューシオの夢想的な 40 数行のマブの女王の話になり、'My mind . . . 'は、遅れてしまうと心配するベンヴェーリオに'I fear too early, for my mind misgives / Some consequence yet hanging in the stars' と応じるロミオの台詞が途中から取られています。同様に、Juliet が立ち上がってイロエを舞い始める詞章は、キャピュレット夫人が前の場（1 幕 3 場）で娘に言って聞かせる 'The fish lives in the sea, and 'tis much pride / For fair without the fair

within to hide.'の後半が組み替えられています。Chorus (地) の'But he, that hath steerage of my course'の'he, that'のコンマは、Romeo の'too boisterous; and it pricks like thorn'のセミコロんとともに、文法上はないほうがよいはずですが、作者は英語版を'English translation'としており、シェイクスピアの原テキストを再構成して日本語の詞章を創作したあと、今度は日本語の詞章（「行方司る御力。行方司る御力。導き／給へわが行く手」；「恋は冷酷／残忍非情。胸刺す茨のつらさかな」）の息づかいを英語に投げ返して、間を示したのかもしれませんが。Chorus の言葉は、ロミ「行方司る御力／地「導き給へわが行く手」と前場の終わりでもう一度繰り返されます。そう言えば、

Cho. (Jul): Too early seen unknown, and known too late! 1.5.138
 Portentous birth of love it is to me, 139
 That I must love a loathed enemy. 140

の'Portentous'は、古版本以来の'Prodigious'から変更されていますが、現代英語のprodigiousはportentousの意では使われなくなっていることから、作者によって外国人観客のために意図的に変更されたものでしょうか。

前場の終わりでChorus (とRomio) が上記の祈りを再度口にする直前の、Chorus の'The course of true love never did run smooth'は、『夏の夜の夢』(A Midsummer Night's Dream) のよく知られた1行(1.1.134)ですが、それに先立つ4行は、作者の思いを込めた純然たる創作かと思われます。

As you are destined to love the ancient foes,
 Bury you the grudge and grow new flowers.
 It is your fate to love your enemy;
 It is the youth to love your enemy;
 地「親の怨恨も／今ははや。親の怨みもいまははや／
 仇敵を愛す運命なれば。恨みを埋め／て新たなる。
 花を咲かせん。運命は。／自らつくりしものならず。生かせ／
 運命。仇を愛せよ。それぞ青春。／胸たぎらせよ灼熱の恋。
 これぞ青春。

同様の創作と思われる箇所がもう一つ、一曲の最後、**KIRI (Finale)**にあります。

Cho.: And now at last, the stricken fathers are re-
 conciled over the dead bodies of their children,
 who have purely loved one another in spite of
 their fathers' long standing enmity, and their
 spirits are born again wearing crowns.

地「愛児の非業に迷い覚め。愛児の非業／
 に迷い覚め。怒りも解けて赦し合う。／
 赦す仲とはなりにける。この世に生き／
 ては純粹に。仇を愛せる青春は。死を／
 経て一つ安らかに。王者となりて蘇／
 る。これぞ真の愛の賜物。美はしき。／
 神のこの世のお浄めと

そのほかの台詞の変更としては、後場のジュリエットが眠り薬を飲む場面で、原テ

クストの'Romeo, Romeo, Romeo! Here's drink--I drink to thee.'が'Romeo, I come! This do I drink to thee.' (この眠り薬を飲めば。四十二時／間後にはロミオに会える…貴方に乾杯) となっていることくらいでしょうか。

*

あらためて前場と後場の全体の構成の概略を眺めて見ます。ジュリエットがイロエを舞い始めると、場面は舞踏会（第1幕第5場）で、そこで二人が初めて交わす言葉（ソネット形式）、続くバルコニーの場でのやりとりを中心に前場は構成され、それが前場全体（詩行にして110行弱）のおよそ8割を占めています。その間に、キャピュレットもティボルトも登場せぬまま、キャピュレットが甥を窘める台詞が4行**Cho. (Capulet)**の言葉として語られます。簡潔にして巧みな工夫です。

後場は、僧ロレンス（間語り）がその後の経緯を語ると、ジュリエットが登場して、覚悟を決めて眠り薬を飲む場面（第4幕第1場）に始まり、ロミオがジュリエット死去のニュースを受けるや、一挙にキャピュレット家の霊廟の場（第5幕第3場）に移ります。パリス（ツレ）、大公（ツレ）が登場し、ChorusがRomeo, Juliet, Watchman,そしてCapuletとMontagueを代弁し、先に引いたキリの「愛児の非業に迷い覚め…」を語ると、[ロミオとジュリエットノ霊、小サナ王冠ツケ白装束ニテ現レ、相舞（中ノ舞）。ヤガテ昇天]して、原テキストを締めくくる大公の台詞を地が語って終わります。結ばれたロミオとジュリエットの霊を登場させたのは、能としては必要な、作者の創作です。

日本語の詞章は、必ずしも原テキストの翻訳ではなく、「昨夜の夢の不思議なる。いかなる星の巡りやらん」「目に見えぬ美しさ隠す心こそ美しき人の誇りなれ」など、自在に能の詞章になっています。個人的な感想を述べると、前場がすっきりしているのに比べて、後場はいささか混み合っているように感じました。そして素人の無責任な思いつきを言えば、ジュリエットをシテにして、劇（ドラマ）が終わったところから一曲を始める工夫はないでしょうか。能『ハムレット』のように、能『ロミオとジュリエット』もいくつかのversionsが試みられることを期待しています。

しかしまずは、新作の完成上演をお祝い申し上げます。

（東京学芸大学元学長、ISHCC顧問）